

知事と県民の意見交換会（由利地域振興局）議事要旨

- テーマ：産業人材の確保・育成と地域産業の活性化
- 日時：令和4年7月5日（火）10:00～12:15
- 場所：【視察】発酵小路 田屋
【意見交換】発酵小路 田屋 ギャラリー「雪の茅舎club」

- 参加者：A氏（協同組合ニカホノサキ 理事長、
一般社団法人鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会研究員）
B氏（Ventos にかほ市地域おこし協力隊）
C氏（有限会社津野商店）
D氏（株式会社齋彌酒造店 常務取締役、
発酵小路 田屋 支配人）
E氏（有限会社けやき 代表取締役社長）
F氏（株式会社藤興業 取締役専務）

佐竹 敬久（秋田県知事）

川村 之聡（由利地域振興局長）

知事挨拶

日本も世界も大変革の時代である。これまでの変化と違って様々な変化が一気に押し寄せている。産業面でいうと何回かの産業革命があったが、正に今第4次産業革命である。情報化が中心の産業革命が起きている。また、地球温暖化によって気候変動が起き、災害や世界の砂漠化あるいは温暖化によって農業も含めて重大な影響を受けている。それにコロナウイルス（オミクロン）や更にウクライナ問題、日本も相当これからの行く末がいろいろな面で課題がある。少子高齢化、秋田もそうだが日本全体の問題である。また、日本の産業の力は弱くなっている。世界的な情報化の波への遅れ、いろいろな面で新しい産業の芽生え、それにチャレンジするという気概がなくなった。日本のベンチャーの数が非常に少ない、あるいは大企業でも保守的で守りに入っている。これから何をどのように前に進めるか、これは人任せでもいけないし、行政も政治も限界がある。民間の力があるか無いかで国の行く末が決まる。地方の中小企業やベンチャー企業が知恵を出して地域を守っていくか、この積み重ねが日本全体の最後の力になる。それを成し遂げる人材、例えば留学に行く人が少ない、様々な場面にチャレンジする人が少ない、自分一人で道を切り開くという気概のある人が少ない。そういう中で秋田も前に進むには、若い人がどのように何を求めて、何を考え、何をしてくれるか、そして行政もそれにどういうふうに支援するか、あるいは行政も一緒になってやる必要もある。そうした意味で様々な新しい仕事、様々な工夫をしながら自分の仕事を前に進めようという方々に集まってもらって現場の声を聞く。商工会長や農協の組合長など産業の方々の会議で話を聞くが、実際に現場でやっている方の声が一番重要である。なかなか私のところまで生の声が届かないので、全県を回って様々な分野でこういう話し合いをして、皆さんの話や皆さん同士のディスカッションを聞き、私の方で勉強するというスタンスでいる。県政を話すというよりも皆さんから自分

の考えを自由に語ってもらいたいと思うのでよろしくお願いします。

視察

(D氏)

弊社は雪の茅舎というお酒を造っており、「発酵小路 田屋」はその直営店として2019年7月5日にオープンし、本日で丸3年目を迎えた。おめでたい日にこのような会に参加させていただくことを大変光栄に思っている。施設に移動しながら御説明させていただく。
※「発酵小路 田屋」を視察。

参加者自己紹介

(A氏)

京都府の出身で大学進学をきっかけに秋田県に住むことになった。その後県外で就職をしたがもう一度秋田で暮らしてみたいと思っていたところ、偶然にかほ市から御縁をいただき、にかほ市で地域おこし協力隊として2年と少し廃校の利活用事業に携わっていた。この4月から鳥海山・飛島ジオパークでお世話になって、また新たな視点で地域の魅力を考えていきたいと思っているところである。今日は、にかほ市内で飲食店や食品加工をしている何名かでチームを組んだニカホノサキの取組の中で、にかほ市を食の観点から外に発信していきたいという活動についてお話しできればと思っている。

(B氏)

去年の4月に東京からにかほ市に移住してきて地域おこし協力隊として活動している。活動内容としては、築100年以上の空き家を利活用するため古民家を改修して、地域の暮らしや農業・漁業を都心の方々が体験できる場所としてゲストハウスを作っている。

(C氏)

両親が経営している有限会社津野商店で働いている。4年前に東京からUターンしたが、東京にいる際は秋田県の移住相談員として、Aターンサポートセンターで相談員の仕事を3年ほどしていた。その経験を買っていただいて、今も由利本荘市役所で週3日移住相談員、残りの日は津野商店と2足のわらじを履いた状態で仕事をしている。もともと由利本荘市の出身で、本当は秋田を出たくないと思いつつも、短大を卒業する際に津野商店を継ぎたいと思ったものの、こういった形で今後経営していけばいいのか、自分が何をすればいいのか何をしたいのかが全く見えず、両親の許しを得てあちこち放浪してきた。そのおかげで、今は何となく食や地域ということにも目を向けられるようになってきて、今日もこの会に参加させていただくことができた。まだまだやれていないことが圧倒的に多いが、私なりにやれることがあればこの地で頑張っていきたいと思っている。

(D氏)

山梨から嫁ぎ、人生の半分はこの素敵な秋田県由利本荘市に住んでいる。田屋ができるまでは齋彌酒造店で主に酒蔵見学の案内をしており、今も広告関係を担当している。石脇にあるたくさんの良いものを皆さんに知っていただきたい、発酵を身近に感じてもらいたい体に良いものを積極的に取り入れることは、実はとても簡単だということをたくさんの方に知っていただきたいという思いで、日々試行錯誤しながら、みんなでメニューを考えて頑張っている。Bさんは私の娘と同じ歳と聞いた。Aさんなど若い方々がいろいろな方面で頑張っているのを新聞で拝見して、そういった方々のお話を聞かせていただくことを楽し

みにしてきた。

（E氏）

有限会社けやきで社長をしている。うちの会社は大きなマシニングと呼ばれる機械で金属やセラミックやガラスなどを加工する昔ながらの町工場である。工場自体は旧鳥海町と旧由利町川西にそれぞれあり、34名ぐらいの社員がいる。私自身は高校まで由利本荘市で育ち、大学で青森に出て就職で東京に行って、東京の嫁先は自営業をしていたので、そのまま手伝うものだと思っていたが、実家の父が体を悪くして余命宣告をされたことで呼び戻されて、月曜から木曜までは秋田に来て、木曜に東京に帰るという生活をしている。

（F氏）

弊社は由利本荘市東由利地域と湯沢の雄勝地域を中心に素材生産事業と造林事業を中心に林業経営をしている。素材生産事業を簡単にいうと、山林所有者から山を買い付けして現場に重機で入ったり、大型トラックで重機を配送したり、現場で切った木を2 m材や4 m材の素材にして製材所に運ぶというものである。私は会社に入って丸2年経過して3年目になる。

意見交換

（局長）

産業人材の確保・育成について、FさんとEさんにお伺いする。

はじめに、Fさんにお伺いする。御社では、林業経験の浅い従業員でも安全に樹木が伐採できる作業補助具「ガイドレーザ」を開発されたが、製品の概要、開発のきっかけや経緯、また、実際に作業現場で使用してみた成果などについて御紹介いただきたい。

（F氏）

林業の現場は危ないことが多い。木を倒すときは倒したい方向に受け口を正確に作る必要がある。林業現場での重大事故というのはチェーンソーを使っただけの伐採作業時が多いと言われていて、狙った方向に木が倒れず周りの木々に引っかかってしまう。これを業界用語で「かかり木」というが、この「かかり木」を外すときにやってはいけない決まり事をやってしまい事故が起こる。この「かかり木」を少しでもなくして事故を減らしていかなければとの思いから開発が始まった。今までは経験と勘で、周りの状況を見ながら自分の目と感覚だけで受け口を作っていた。それをレーザで可視化して分かりやすくした。伐倒方向をレーザで可視化して、勘だけに頼らなくなるべく正確な受け口を作るための補助装置である。付属のガイド板も使うことで自分の感覚と実際のずれを確認できる。若い人のトレーニング用・育成用としても活用できる。社長が製材業者に行ったときに、製材する機械にレーザが使われていたのを見て何かに使えないかと思ったこと、ゴルフのパットの練習用で狙っている方向を確認できるラインレーザをたまたま購入し、何かにうまく使えるのではないかと思ったことから、秋田県産業技術センターのアドバイスや県の助成金を利用させてもらいながら開発していった。事故を起こさない製品というのが人材育成や人材確保につながる。林業従事者が増えていかないという状況の中、そういったところにも貢献できればと思っている。

（知事）

本来は林業機械メーカーが考えそうなものだが、現場の発想から製品化された。

委託生産か。

（F氏）

大仙市の業者に製造してもらっている。

（局長）

伐採作業補助具の普及のため、全国各地で開催される安全講習会にも参加されていると伺っているが、皆さんの反応はどうか。

（F氏）

参加した若い方の反応は良いが、個人で購入できるものではないので、事業主や監督者が従業員に使用させようという意識になるよう頑張らないといけないと思っている。

（C氏）

市内の企業で使っているところはあるのか。

（F氏）

市内では秋田県森林組合連合会、県外では青森県森連や北海道、新潟県、京都府の林業大学校などに購入していただいている。ただし、現場の人たちは面倒くさがって、無くてもいいとの反応がある。

（知事）

若い方々はマニュアル化や機械化が常識になっている。若い人にはこれがあるのが当たり前となり、事業所に導入されていなければ従業員が集まらない状況になればよい。

（F氏）

知事がおっしゃるとおり、あって当たり前となるにはかなり時間がかかると思うが、育成、トレーニング用としても良い製品だと思う。

（局長）

機械を使って経験の浅い方が作業をしっかりとできるというのは、大変魅力的な機械という印象だが。

（F氏）

見える化しているというのは、指導する側も教えやすいと思う。

（局長）

今後、人材確保・育成のために取り組もうとしていることがあれば御紹介いただきたい。

（F氏）

私がかいに入ってからホームページを変えたり、製品の説明を紙だけではなく動画を作ってYouTubeにアップしたり、動画も格好良く制作して若い人に良いと思ってもらえるように工夫をしている。

（局長）

次にEさんにお伺いする。先代から引き継がれた社員の皆さんは貴重な財産だと思う。高齢化や世代交代が進む中での人材確保・育成は大きな課題だと思うが、Eさんが課題解決のために取り組んでいることなどを御紹介いただきたい。

（E氏）

由利本荘地域は賃金が低くても人が集まっていた。だが、継続していくと人が集まりづらくなり、メインとなる従業員が定年退職を迎えていく中、次のエースとなる人材を育てる、を見つけるためには賃金を上げていかないといけない。まず採用のところでは、基本給を3万円上げて募集をしているが応募がない。さらにハローワークの求人票や秋田銀行のキャリアピタあきたに、奨学金の返済に対して月2万円助成すると載せたりしているが、応募が無い状況である。私どものような油などであまりきれいではない環境のところには人が来ない。大学や高校を中退した方が偶に応募してくれ、こうした方もエース社員となっていたきたいと感じる方が多い。Aターンや転職説明会に中退者向けのようなのがあると参加させて欲しい。採用者の基本給を上げると、既存の従業員の給料も上げるなど、同じ能力があれば同じくらいの年収としないといけない。人件費が上がっていく中、今は父が亡くなったことで支給の必要のなくなった役員報酬分で調整できているが、今後も人件費は上がっていくものと考えている。

（局長）

県の方でも新卒者向けの企業説明は行っているが、中退者向けのフォローというのとはできていない。把握するのも難しい。

（知事）

募集要項に学歴不問とする会社があけっこうある。研修期間を6か月間設けたり、入社後の職業訓練校で1年間学ぶ機会を設けるなど、求職者の不安を取り除き、中退者の方も採用したいとのメッセージを伝えられるとよい。

機械加工は油で汚いというイメージをどう払拭するか。ユニフォームによってイメージが変わる例もある。中小の工務店で格好いいユニフォームにしたところ採用が増えたという話を聞いたことがある。

（局長）

今後の事業展開や新たに取り組もうとしていることがあれば御紹介いただきたい。

（E氏）

去年からガラスの加工、マシニングでの加工プラス研磨を始めた。会社自体が車の車載製品で3割、セラミック関係が3割で、ほぼ受注先が1社のため、1社の取引内容が変わると一気に売り上げに影響がでる。発注の依頼はあるが、素材を分散させることによる安定経営を目指すため、ガラスの加工を始めた。

（C氏）

Eさんにお伺いしたい。資料にある個性に合った仕事を任せたり、女性技術者を増やしていくための働きやすい環境づくりとは、どのようなことをされているのか。

（E氏）

産休から復帰した女性従業員に機械加工に従事してもらっているが、実情に応じた勤務時間に柔軟に対応し、急な休暇にも対応できるようにしている。定時退社で、女性でも働ける事例になってもらいたいと考えている。

個性に合った仕事という点では、昇給の可能性を示し、その人が能力を発揮できる仕事を提案し、新たな業務に従事してもらうよう促している。

（B氏）

にかほ市の製造業には若い外国人技能実習生がたくさんいて、週末にフットサルを一緒にしたり楽しい生活を送っている人たちもいる。（Eさんの会社で）外国人技能実習生を受け入れていない理由として、やりにくさなどはあるのか。

（E氏）

にかほ地域での外国人技能実習生の受入れが理想的だと思うのは、車を持たなくても秋田市へ電車で行ける、買い物も自転車で行ける、冬も雪が少ないことである。山間部は雪が多いので車が必須であることや駅までの移動も車が必要である。外国人技能実習生に来てもらったとしても、毎週末に車で買い物に連れていくだけでは、その人の人生が貧しすぎる。今の時代は人とSNSでつながることもできるが、実際に会うためには車が必要で、外国人技能実習生の生活の豊かさのことを考えると受け入れることはできない。知り合いの企業では週末に登山に連れて行ったりしている話も聞いているが、私は、週末は東京に帰るためそういったことはできない。

（D氏）

年に何回か伐採作業時の痛ましい事故のニュースを見る。考えさせられたのが、若い人たちが何かを希望しても経営者サイドが受け入れないということ。経営者として若い人の意見を聞いて取り入れることが必要だと感じた。

（局長）

次ににかほ市の魅力発掘に取り組んでいるAさんとBさんにお伺いする。

まずはAさんにお伺いする。にかほ市の魅力、実際に住んでみての感想を教えてください。

（A氏）

にかほ市には訪れたこともなかったが、秋田県のどこかに住めるということで、偶然決まったという出会いだった。山と海の距離が近いことが景観的に美しいのはもちろんだが、そのことで育まれている食の恵みが暮らしの豊かさにつながっていると思っている。ニカホノサキを立ち上げたときにみんなで話したが、食べるということは生きる上で不可欠なことであり、食べることの豊かさが暮らしの豊かさに直結するのではないかとと思っている。私はにかほ市の魅力というのは自然環境とそれが生み出す食の豊かさと思っている。比較的小さな町なので、知り合いの知り合いはみんな知り合いだのと、日々生活をしていて感じる。私のようなよそ者が来ても誰か助けてくれる人が必ずどこかにいて、顔の見えるコミュニティというのは素晴らしいことだと思っている。今、都市では人と人とのつながりが希薄になっているという社会問題もあるが、にかほという地域のコミュニティを持続させて、若い人でもお年寄りでも一人で住んでいてもコミュニティがあるから大丈夫とい

う地域になっていけばいいと思っている。

（局長）

ニカホノサキという協同組合を設立されていろいろな活動をされていると思うが、イベントを企画されていたら御紹介いただきたい。

（A氏）

今年の9月を予定しているが、にかほ市は食材に豊かなものがあり、景色も美しい。そういったにかほ市の良さを五感で感じてほしいと考え、道の駅象潟ねむの丘にある、夕日がきれいに見える芝生の丘にテーブルを並べて、沈む夕日と共にフレンチのコース料理でにかほ市の食材とお酒を一緒に味わってもらおう野外レストランを企画している。今年初めての企画なので、比較的小さな規模で自分たちのできる範囲を試してみたいと思っている。これを機会に、地域の人たちにも一緒におもてなしをする気持ちが芽生え、毎年1回にかほ市では野外レストランのイベントがあるんだと、お祭りのようににかほ市といえどこのイベントというように定着していけばいいなと思いつつ、私達だけでなく一緒に夢をみませんかと地域の方々に声掛けしているところである。

（局長）

この4月からは鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会の研究員としても取り組んでいらっしゃるが、ジオパークを通しての地域食材の発信について考えていることはあるか。

（A氏）

ジオパークはこの4月まで、地質や地形のことを専門的に研究している人たちがいるといった程度にしか認識していなかった。九十九島の歴史を学ぶことで、ジオパークは地殻変動や火山の噴火を伝えていくものではなく、過去の歴史がつくってきた大地が今の暮らしを作っていることなのだという事を知った。私のジオパークのイメージは、大地の下地の層を見るのではなく、大地の上に成り立つ歴史や文化や暮らしも全部含めて、地層として伝えていく活動なのだと思っている。食の豊かさ、風景の美しさ、伝統行事などをつなげて考えることができる取組だと思っている。私は食に興味があるので、ここだからこそ生まれた食の恵み、先ほど田屋さんを見せていただいたときの、「この石脇の地域は水がおいしくて、酒やうどん、いろんな業種が生まれてきた」という、この地域の自然環境の上に成り立っていて、この地域の文化になっているというストーリーが素晴らしいと思った。自分もストーリーで食を伝えていくということをやっていきたいと思っている。

（局長）

具体的な方向性、イメージはあるか。

（A氏）

ジオパークの活動の最たる目的というのは、この地域の暮らしというものを後世に受け継いでいこうということなので、こういった魅力を伝えるとともにその暮らしを維持するために必要なことをしていく。それがつまり産業の振興だったり、例えば食であれば食の商品が売れていくということなので、その地域での営みを発信し、ジオパークの考え方をプラスすることで振興につながることであればやっていきたいと思っている。ジオパークには認定商品というものがあって、にかほ市や由利本荘市、山形県の遊佐町や酒田市で

作られた食材を使った商品で、ジオパークと関連するものをジオパーク協議会で認定している。ニカホノサキで商品開発をさせてもらっているときに、「別にジオパークの認定商品というシールが貼ってあってもお客さんの立場に立ったらおいしいそうではないな」、「認定商品というのはこちらのエゴになってしまっていないか」など、4月にきて偉そうだが、制度として機能していないと思っているので、そこを事業者が使いたいという制度にしていきたいと思っているが、まだ答えが出ていない。

（局長）

次にBさんにお伺いする。にかほ市の地域おこし協力隊に就任して1年が経過したが、実際に移住してみての感想や魅力を感じるところはどんなところか。

（B氏）

1年経っての感想だが、こちらに来て生活の豊かさを感じる。生活の豊かさは何かというところ、僕は東京生まれ東京育ち、隣に住んでいる人が誰か知らないような住宅街で生まれた。今、ゲストハウスを作っている場所が（にかほ市）横岡地域という鳥海山の1合目に当たるが、人口が250人ぐらいの小さな集落で、この奥には村がないようなところである。そこに住んでいる人の名字の8割が「サイトウ」で、みんな親戚のようなところで暮らしている。ここの暮らしで感じるのは、ただいだけでも価値になる、僕がいることによって、新しい人が来てくれたということで喜んでくれること。地域の人からお裾分けで野菜をもらったり米をもらったりするが、そのお裾分けできる人がいだけでも価値になるという、田舎の暮らしがいいなと感じている。それから、魅力は、Aさんがおっしゃってくださったことが大半だと僕も思っている。鳥海山から日本海まで16kmという中で、食は鳥海山の伏流水のおかげでおいしいと感じる部分で、それに加えてアクティビティの面でも鳥海山の登山であったり、海でサーフィンができたり、漁業・農業体験みたいなのところでも様々なアクティビティがこれからできていくのではないかと、観光資源としてはたくさんあるのかなと思っている。

（局長）

現在横岡地区でゲストハウスを作ろうということで作業中だったが、進捗状況と完成後の活用方法について教えていただきたい。

（B氏）

進捗状況は10%くらいで、解体を始めたところである。これから自分たちで改修を始めていくが、資金がないのでいろんな人に来てもらいながら一緒に改修を行っている。完成は10月半ばを予定していて、それまでに何回かイベントを行おうと考えている。ゲストハウスは主に旅人が集まる場所、簡易宿所と言われているものだが、私たちは横のつながりが強い。横手にある「CAMOSIBA（カモシバ）」さんや、山形にある「ギルドハウス」というゲストハウスなどの方々のお手伝いが絡んだイベントをやっている。ゲストハウスの今後の活用方法については、ハブの部分になる一番のターゲットとして都会出身者の二拠点居住を目指す人へのアプローチをしていきたいと考えている。東京のように関係が希薄になっている部分を解消するのが田舎の良さだと思っているので、体験を通して地域との交流を行って心の豊かさを養うような場所として作っていきたい。大学の授業を請け負っているので、東京の大学生のフィールドワークの場所であったり、移住体験ツアーとして農業体験なども考えている。また、私は1年半ワーキングホリ

デーで海外に行っており、英語が話せるので、外国人のインバウンドとして東京は飽きられている中、秋田の良さ、漁業・農業体験を通して田舎の良さを感じてもらうためのコンテンツづくりをしていきたいと思っている。秋田県には20代で新規事業を立ち上げている若者がたくさんいて、そういった方々のつながりが強いので、一番は、そういった方々とのコラボレーションイベントの会場として使っていきたいと考えている。

（知事）

由利本荘市やにかほ市以外の県内の方々にとって、この地域のイメージはTDKと鳥海山である。ところが、例えば私の生まれた角館は武家屋敷、田沢湖、横手は送り盆、湯沢は栗駒山系、県北に行くと縄文遺跡、白神山地、食べ物も男鹿に行くと石焼鍋、県北ではきりたんぼ、由利本荘は曖昧だ。この地域は祭りが無い。祭りが無いということは一度に（わっと）来る人がいない。観光はどこに行けばいいのか。あまりにも広い。本荘由利地域はイメージがTDKに偏りすぎていて、TDKが全盛のときはこの地域が断トツに県内で所得が高かったし、豊かだった。何が核になるのか、尖った何か、訴求力がない。ジオパークの関係も男鹿に行くと周遊して見られるし、湯沢に行くと川原毛地獄などがあるが、由利地域は核というものが無い。そこでどういうふうにプロデュースするのか。あまりにもたくさんありすぎて、どれに絞るか絞り方が難しい。地域おこしやベンチャーの全県のコラボレーションの企画は良い。来年度に向けて県で予算化する。

（B氏）

秋田市の映画館を造ったアウトクロープ・シネマや東成瀬村の井戸端サウナ（移動式サウナ）、ゲストハウスだったり、牧場の放牧を行っている方々とのコミュニティがあって、その中でコラボイベントをやっていく。これの何がいいかというと、コラボマーケティングにつながる。日々の価値が多様化している中で、この人のファン、この事業のファンという方がたくさんいる。その人たちを飽きさせないように、この中でコラボしていったって、新しい価値を感じていくということが、県内での新しい職業選択にもなるし、良さにつながっていると思うので、この活動を行いたい。

（局長）

地域の人たちのBさんの活動に対しての反応はどうか。

（B氏）

活動の反応としては、みんな応援してくれている。先ほど知事がおっしゃったとおり、にかほ市は特定の何かという観光の資源を持っていない、というかむしろありすぎて、どこを押し出したら良いかわからない状態だ。それがあってということは、暮らしの良さの恩恵を受けている場所で海と山が近く、遊びも食べ物も豊かなので、暮らしというものをテーマに、生活体験を提供していきたいと考えている。中長期的にこちらに来てもらって、仕事はどこでも良いし、これから自動運転等で場所も移動も制限がなくなっていく中で、東京で働くことが一番ということではないと思っているので、二拠点で生活をするためのベストな場所がにかほ市なのかなと、そういう増やし方をしたいと思っている。こういった話を地域の方に話すと特に子ども達は喜ぶ。やはりこちらにずっと住んで、新しい刺激がなくて東京に行きたいと言う。その理由が新しい友達と出会いたいとのことで、私はそれを推奨したいと考えていて、絶対に行けと話している。行くことによって外から見る良さが見えてくるから、その後に戻ってきてほしいと伝えている。そういう地域の方々

の刺激になればと思い地域の皆さんにも応援してもらっている。

（D氏）

私は嫁いでこの地に来たが、継承していくことの大変さを実感している。由利正宗が知られていない時代に父がすごく頑張ってつなげてきたものを、良い時代に私達が受け継いでいる。それを今度は私達が次につなぎ、魅力あるところにしたいと思っている。若さでできることは、素晴らしいし、うらやましいし、本当に是非頑張りたい。お互いに協力できることがあればやりたいと思うし、私も助けて欲しいと思う。たくましいお二人の意見がうれしく、この先に素晴らしいことが待っているんじゃないかと思って聞かせていただいた。

（E氏）

若い人が来てくれる、それだけでうれしい気持ちになる。ここに住んでいるとTDKにまず就職するかみたいなことしか、高校を卒業した子には選択肢がない。そういった中で新しい職種、新しい仕事を目の前で展開されるというのはすごく刺激的だと思う。

（B氏）

Aさんもおっしゃっていたが、来る前はそういうところに目がいかなくて、にかほ市を知らなかったの、来てから地域のつながりというのがすごくいいなと、心の底からここにいたいなと思っているので、こういった意見をいただけるのはすごくうれしい。

（知事）

この地域に移住した人が、雪が好きで鳥海の雪がいっぱいあるところがいい、これが魅力だという。人間の考えは全部違う。全てが都会志向とか大企業志向ではない。人に使われることが嫌な人がたくさんいたほうがいい。この方々が世の中を変える。人に使われるということはその組織にがんじがらめになる。ある程度若いうちは自由に、失敗してもいい。取り返しがつくから。まず好きなこと、興味のあることをやって、そこから何かを得る。失敗もいい経験になる。まわりの大人が少子化だから安定してほしいとなってしまう。これではますます地域社会がシュリンク（縮小）していく。最近の傾向として地元に対する意識は若い人の方がいいと思う。歳をとった人は昔の惨めな世界しか知らない。だから昔の人は秋田には何もないという。外を見てくれば秋田の良さがわかる。逆に言えば県外の方の方が平等に客観的に見えるから、県外出身の方の発言が様々な形で生きてくる。若いというのは年齢だけではない。若い方々にはやりたいことをやっていただきたい。少しぐらい地元につきいことを言ってもらってもいい。嫌われてもいいから。

（B氏）

知事に聞いてみたいことがある。全国の魅力度ランキングでは、秋田県は26位。消滅しない都道府県ランキングで46位。みんな消滅すると思っている。地域の方々がそういうネガティブな考えを持っていると私は感じている。外から見ると良いのに中から見たら良くない。その中でも生活は豊かだと思う。そういう所を売りにしてやっていきたいと思っているが、知事の秋田の将来像や、どのようにしていきたいのかをお聞きしたい。

（知事）

秋田は、世界や日本がおかしくなったときに良くなる。何故か。今まで全く想定してい

なかったこと、例えば食糧でいうと、ウクライナや中国、そして日本全体の力が変化したとき、お金で食糧を買うことができなくなる。そうすると秋田は農業県であり、秋田はずっと農業。一番大事。後はエネルギー、電力と水。この3つを持っていれば、地球の温暖化、災害に対する安全度は日本一である。将来、東南海地震などの大地震がいずれある。太平洋戦争、明治維新、朝鮮動乱、世界が変になると秋田は良くなる。人の不幸につけこむわけではないが、私は秋田は消滅することはないと思う。ただ、何もしないわけにはいかない。なるべくそうならないように努力が必要だが、黙っていても秋田はきちんと生き残る。なぜかという人間に生存に必要な食べ物、エネルギー、水、広大な空間があれば、絶対に最後は地球温暖化など様々な日本の課題が増えてきても、こういう所が一番住みやすいし、住むことができる。私は今の人口減少や高齢化などの対策はやるが、将来、私が死んだ後、そう捨てたもんじゃないと思う。そう思うと希望が湧いてくる。これから「秋田が無ければ日本人が食えない」となってくると思う。西日本は暑くなりすぎて大変な状態になる。台風もそう。だから、東北、北海道にウェイトが掛かってくると思う。東京はいつまでもあのままだったらおかしい。そうならないと良いとは思いますが、いずれ30年以内に大地震がある。絶対に何かあれば、日本の安全保障上の関係で秋田は重要な地位を占める。希望を持ってやりましょう。

（B氏）

すごい将来的な部分で、もしそうなった場合、確かに秋田は残る、一次産業は基盤になると思うので仰るとおりだなと思ったが、東北には青森も岩手もある、そういうところも一緒な環境だ。そういうところで東北の中でも一番に秋田で暮らしていきたいと思えるような発信の仕方など、そうした政策をとるとというのが、これから一番大事という認識で合っているか。

（知事）

災害の安全度と子どもの学力は高い。高校でIT能力日本一に取り組もうと思っている。今年から予算をかけてGoogleと組んでIT能力の授業を全部Googleがやる。教材も全生徒に配って、プログラミング能力を高めようと、小中学生の学力日本一、高校のIT能力日本一、あとは英語をしっかりとやるとどこでも生きていける。そのぐらいのことをやろうとしている。

（局長）

にかほ地区だけでなく、県全体に影響を及ぼすいろんなつながりができるとよいと思うのでどうぞこれからも頑張ってください。

由利本荘市の地域活性化についてCさんとDさんにお伺いする。まずCさんにお伺いする。東京からUターンされて創業70年余りの老舗乾物店を御両親と営まれているが、秋田に戻ってからの活動状況について御紹介いただきたい。

（C氏）

実際に4年前の春に帰ってきたときに、津野商店を今後どうしていきたいかということをお両親と話をした。結果的には地域の人たちのために、今自分たちが持てるもので、今大事に進めていきたいもの、人に伝えていきたいことが何かということを考え、改めて取り扱っている食品、乾物、昆布や煮干しといったものを中心として、健康や安心安全豊かさといった面を見据えて営業していきたいと話していた。

新たな取組の実施に至った経緯は、創業70年を過ぎ2代目の世代のお客様が高齢化し、客層がどんどん変わっていったということが大きかった。客層が変わっていったことで店の認知率が下がっていったときに、お客さんに、地域の方にどういったことを伝えていけないといけないのかということを考え、それを形にして広告というか、今着ているTシャツの後ろにある絵と「やさしいだし生活」をモチーフに今後やっていこうと思った。また、商品を手に取りやすい価格帯や量にした。店舗改善は商工会の力を借りて「よろず支援拠点」を紹介していただき、「0円店舗改善」を行い、お客さんが楽しんでもらえるような内装に変更した。ネット上での情報発信も当時全くできていなかったのも、そこに力を入れていこうということで補助金を活用して、ホームページやSNSで、発信する情報があればどんどん載せている。何よりうれしかったのは私が帰ってきたことで母のやる気が湧いたことで、「だしカフェ」も母の発案で始めた。母が昔から出汁を味わってもらいたい、気軽に生活に取り入れやすいものなんだ、そんなにハードルの高い物ではないんだということをすごく話していたので、母の思いと店にあるものを組み合わせてイベント化して情報発信し、うまい塩梅でというのもおかしいが、母とはうまくタッグが組めていると感じている。

取り組んできた中で難しいことは、おかげさまで徐々に認知率が上がってきて、津野商店という言葉で「乾物の」と言ってくくださる方が増えてきたことがうれしい反面、地球温暖化で煮干しだとか海産物の安定した供給が難しくなっていることである。また、経営は家族で仕事をさせてもらっているが、今後の組織の形態も考えていかなければならないなどいろいろと考えることはある。

今後取組もうと思っていることは、乾物や出汁はハードルが高く、自分の生活に取り入れにくいと考えている若い方が多くて、そんなに時間をかけていられないと仰る方もいらっしゃる。それを否定する気はないが、友人が出汁を取るときに自分の心身のバロメーターになっていると話していた。出汁を取る作業の中で、自分の心身の具合が見て取れる、料理はそういう面がある。やる気のないときの料理はあまりおいしくならない、楽しくやる気のあるときの料理はおいしかったりするもので、そういうことを伝えていける取組がしたい。もっと、イベント、ワークショップ、味噌出汁・味噌玉のワークショップの回数を増やしたい。店舗の側に帰りにちょっとお茶していこうかと立ち寄れる場所がない。少し暑くなってくる時期に休むとか、吹雪のときに暖をとるとか、街を歩いている方をみると寄ってくれる場所があればいいのにと思ったりするので、そういう場の提供もやっていけたらと思っている。

（知事）

私も料理をする。出汁も魚介類も温暖化で変わってきている。いつまでも同じ物はない。ハタハタも千年前からあったかというとな。魚は百年くらいで変わる。だからなくなるのは当たり前。今、パリのフレンチでは日本の出汁が相当使われている。ある人がフランスに行って出汁を売り込んだら、ものすごく売れた。むしろ出汁を使ったフレンチが売れている。出汁は日本の和食だけでなく。出汁文化は日本でだんだん廃れていっても世界的には上がっている。希望を持ってほしい。

（局長）

最後に、Dさんからこの田屋を今後どのように地域の中で生かしていこうと考えているか教えていただきたい。

(D氏)

やはり出汁も食事を作るに当たり大事なところで、私は子どもの頃から出汁を取るのが当たり前の家で育ってきて、普通に出汁を取ることをしていたので、若い方達があまり知らなかったことに驚きもあった。それで今、コラボさせていただきをお願いをしているところだが、うちで使っている出汁と味噌で簡単にお味噌汁ができるんだということを、それが地域の味噌であり、地域の出汁であり、地域で売られている味をたくさんの方に知っていただきたい。Cさんもそうだが、由利本荘市内でそういったことをやっている方達と一緒に何かコラボしながら、たくさんのお店をうちで宣伝できたらいいかなと思っている。

うちはトイレの掃除を障害のある方たちの施設をお願いをしている。地域の活性化のためには、そういった方達が働く場所の提供であったり、うちで働いてもらえるような人を今後も増やしていけるような雇用の促進もやっていきたい。齋彌酒造店では常時従業員は30〜40人いるが、夏の間は野菜やお米やうちで使う酒米を作っている農家の方達が、冬の間だけ蔵人として20人ほどやってくる。今若い人たちの農家離れとも言われているが、若い農家の人たちが次代を継承し、家を守りながら一生懸命米を作ってそれを秋に刈り取ってやってくる。蔵での酒造りが、若い農家の方達の冬の雇用の促進にもつながればと思っている。私は25歳でこの土地に嫁いでいたが、ここの良さはいっぱいある。先ほど知事もおっしゃっていたが、自分は外部から来て、内部の人が余りにネガティブでもものの良さを伝えていないことから、たくさんの方に地元の良さを伝えられたらという思いで動いている。自分のできること、そして由利本荘市で頑張っていて、それが秋田県につながって全国からたくさんの方がいらっしゃるようなシステム的なことをやっていけたらと、日々SNS、フェイスブックやInstagramに何を載せようかと楽しんで毎日頑張っている。今後ともたくさんの方に御意見をいただきながら、そして地域の方々にも喜んでいただけるようなお店づくりができたらと思っている。

知事総括

現場に来なければ聞けない話を聞くことができた。元気がでる話も聞けてよかったと思った。酒屋さんの話をいうと、私は県庁に入って最初にお酒の仕事を担当した。銘柄も蔵も少なくなったが、量は少ないが高級酒、吟醸酒、秋田のお酒が、また盛り上がってきている。今のDさんのようにお酒を造りながら、周辺の産業とコラボして、それを取り入れて蔵を盛り上げている。この10月にパリにも相当のお酒を持っていく。フランス、リースのロブションでは秋田のお酒を使う。そういう時代になった。どんな商売も浮き沈みはある。そのときにどのように周辺の情報を手に入れてうまく活用するか、あるいはそれとは違う独立の流れをつくるか。いいところは取り入れて、地元の人にとって、このお店があって良かったというふうになったらいい。地元で愛されないとダメ。そういう意味でこれからも頑張りたい。先ほど話していた様々な県内で活動されている方達のイベントを、来年県事業として実施する。Bさんの仲間以外にも、県内にはいろんな面白い人がいっぱいいる。一度そういったものをやってみるといいと思うので、イベントに向けていい題材を出してほしい。ありがとうございました。